

古典語における形容詞連用形・テ形の副詞的用法について 菊池そのみ

本発表は形容詞テ形の副詞的用法の歴史的変化を形容詞連用形との比較に基づいて明らかにするものである。先行研究を踏まえれば現代語では形容詞連用形の副詞的用法は許容される一方で、形容詞テ形の副詞的用法は許容されない（「早く走る」、「*早くて走る」）。これに対して中古語では形容詞連用形、テ形共に副詞的用法の用例が見られる。この点に着眼し、①通時的な用例調査によって量的推移、語のバリエーション、事態の特徴の3つの観点から形容詞テ形の副詞的用法の歴史的変化を捉えることと②形容詞連用形との比較に基づき、〈状況〉と〈様態〉との2類に分けることによって形容詞テ形の副詞的用法の衰退のプロセスを明らかにすることとの2点の本発表の目的である。

まず、通時的な用例調査によって形容詞テ形の副詞的用法について明らかにした点は以下の3点である。①上代・中古では形容詞テ形全体の3割程を占めていた副詞的用法は時代が下るに連れて減少する。②テ形となる形容詞とテ形に下接する動詞とに着眼すると、時代が下るに連れて語のバリエーションは減少していき、特に中古・中世鎌倉期に多く見られていた「過ぐ」、「過ぐす」、「止む」などの動詞が中世室町期以降には見られなくなる。③近世期には「久しうて〜」の形で固定化した用例や恒常的な性質を表す用例が中心となり、後者は現代語にも一部残っていると言える。

次に用例調査を踏まえ、〈状況〉、〈様態〉の別を導入することによって形容詞テ形の副詞的用法の衰退プロセスの解明を試みる。まず、形容詞連用形との比較から上代・中古語の形容詞テ形は〈状況〉を表すものであることを示す。この副詞的用法の形容詞テ形は節内に主節と異なる主語が現れるということから現代語の副詞的用法（従属節分類における「A類」）のテ形節よりも節サイズが大きかったと考えられる。このことを踏まえ、時代が下るに連れて〈状況〉の用例が減少していくことは副詞的用法のテ形節の節サイズが次第に小さくなっていく（＝主節と異なる主語を許容できなくなる）ことと連動しているという可能性を指摘する。